愛知東邦大学 シラバス

開講年度(Year)	2025年度	開講期(Semester)	前期
授業科目名(Course name)	サブカルチャー論		
担当者(Instructors)	小林 貞弘	配当年次(Dividend year)	2
単位数(Credits)	2	必修・選択(Required / selection)	選択

■授業の目的と概要(Course purpose/outline)

サブカルチャーについて、特に日本アニメとその歴史を中心に、多角的に考察する。この授業は、アニメのマニアックな知識を習得することではなく、ものごとを自由で柔軟に思考する習慣が定着することを目指している。アニメをあくまでも学際的な対象として扱い、複数の分野や問題圏を横断していくようなかたちで授業を展開するつもりである。

■授業形態・授業の方法(Class form)

授業形態(Class form)	講義
授業の方法(Class method)	講師が用意したレジュメをもとに授業を行う。学生にはレジュメの穴埋めをしてもらう。アニメを扱うことから、毎回複数の映像を断片的に使用する。真面目に視聴しないと単位取得は困難である。映像は、試験や課題に関わるものという前提で使用する。

■各回のテーマとその内容(Each theme and its contents)

回数(Num)	テーマ(Theme)	内容(Contents)	メディア区分(Media)
第1回	イントロダクション：アニメを学問するとはどういうことか。	まずはアニメを学ぶ意味について考える。研究範囲や対象を明確にしたうえで、はたして「アニメは日本の文化だ」と言えるのか否かについて考える。最後に、アニソンを取り上げ、アニメに対する社会的認識の変化を追う。	□
第2回	アニメの定義：アニメとは何か。	アート系・実験系・プロパガンダ系の代表作をいくつか視聴する。これらを比較の対象とすることで、この授業が主に取り上げる商業アニメの特性について確認する。	□
第3回	日本アニメ史を概観する。	表現の洗練や技術の進化、エポックメーキング的な作品を確認しながら、日本アニメ史のアウトラインを提示する。いわゆる「世代論」や「若者論」を交えながら、長寿アニメが世紀や世代を超えて愛されている要因にも言及したい。	□
第4回	手塚治虫の功罪：宮崎駿の手塚批判を足掛かりに	ストーリーマンガの創始者・手塚治虫が日本アニメにもたらした功罪について、宮崎駿による手塚批判を足掛かりにして論じる。手塚が先駆けたテレビアニメの制作体制や表現の工夫を取り上げる。	□
第5回	東映動画からスタジオジブリへ	戦後の日本アニメを支えた多くの才能を輩出した東映動画を取り上げる。この会社で腕を磨いた重要人物として大塚康生・高畑勲・宮崎駿等が挙げられる。東映動画の成したものがいかにスタジオジブリへ引き継がれたかについて論じる。	□
第6回	テレビアニメの全盛期：1970年代	日本アニメの特徴としてしばしば言及される「ジャンルの多様性」について、特にスポ根もの・ロボットものを例にして考える。第5回目からの続きで、その当時はアニメブームの主流からは外れていた宮崎駿の1970年代の仕事について言及する。	□
第7回	「ルパン三世 カリオストロの城」をめぐって	宮崎駿が初めて監督した劇場公開作品「カリオストロの城」を例に、古典的なドラマトゥルギーである「スリー・アクト」の概念を紹介する。この作品が名作として色褪せない理由をドラマの構造に着眼して解説する。	□
第8回	劇場公開作品は元気だった：1980年代	角川映画がメディアミックスを展開し、ビデオデッキやビデオテープが普及しはじめ、アイドル人気が全盛期を迎えた1980年代の時代状況が、アニメ史にどのように反映されていたかを検証する。キーワードは「少女性」である。	□
第9回	二人の巨匠：高畑勲と宮崎駿	高畑勲が「30点」と評価した「風の谷のナウシカ」の課題は、「もののけ姫」に継承された。この課題に対して、宮崎駿がどのような回答を出したのか、宮崎自身が傾倒した照葉樹林文化論やニヒリズム（虚無主義）に照らし合わせて検証する。	□

第10回	「新世紀エヴァンゲリオン」の衝撃	「新世紀エヴァンゲリオン」は、「風の谷のナウシカ」で巨神兵の場面を担当した庵野秀明が監督した、社会現象にもなった作品である。くしくも放映されたのは1995年のことであった。「失われた10年」を現代を知るのに有効なキーワードにして論じるとともに、波紋をよんだテレビアニメ版第25・26話について考える。	□
第11回	セカイ系とは何だったのか。	新海誠監督の短編アニメ「ほしのこえ」を視聴する。セカイ系の定義、その後の展開をふまえて、21世紀になって突出してきた「自閉症」という現象について考える。	□
第12回	平成アニメのいろいろ（1989-2018）	受講生にとって自我の形成期にあたる平成時代中期から後期までを主に照準する。この回は、批評する際に安易に用いられがちな「オリジナリティ」「世界観」という用語について考える機会にしたい。	□
第13回	誰もが一度は通る道：幼児向けアニメの世界	特に「異形のキャラクター」を取り上げる。キャラクターが子供に愛される要因について、図像・内面・意味を手掛かりにして考える。高畑勲監督による「パンダコパンダ」を視聴する予定。愛される要因がいかにトトロに継承されたかについて論じる。	□
第14回	アニメは子どもたちのために：宮崎駿のアニメ観	子どもが大人になる過程で試練として迎えるイニシエーション（通過儀礼）をテーマにした作品として、「魔女の宅急便」その他のジブリアニメを取り上げる。また、「ハウルの動く城」を通してモラトリアムとそこからの脱出についても取り上げる。	□
第15回	アニメの問題圏：日本アニメの今とこれから	たくさんのキーワードをもとに、日本アニメの現在と未来について、コミュニケーションモデルに基づいて整理する。この回のキーワードは「グローバル化」「多チャンネル化」「地域振興」「政策委員会方式」等である。	□

■授業時間外学習（予習・復習）の内容(Preparation/review details)

①参考図書を2冊以上読むことを課す。１冊５時間程度として２冊で10時間程度、じっくり丁寧に読んでほしい。試験の記述問題対策にもなる。 ②毎回の授業には「せめてこれだけはインプットしてほしい」ことがある。Teamsのクイズや課題に積極的に取り組むことで定着を図ること。合わせてレジュメを読み直すなどしておくとよい（毎回30分程度）。 ③断片的にしか見せられなかった作品のうち、何か心に響くものがあれば、全体を通して視聴しておくことが望ましい。

■課題とフィードバックの方法(Assignments/feedback)

TEAMSの課題やクイズへの積極的参加を成績評価に還元する。1回あたり全体の2%としてカウントする。

■授業の到達目標と評価基準(Course goals)

区分(Division)	DP区分(DP division)	内容(DP contents)
知識・技能	**◆ 2019全学共通DP1**	日本文化としてのアニメに関して、その歴史や特徴について一般的に言及されていることを基礎知識として吸収したうえで、自分なりの価値判断に基づいてアニメを論じることができる。

■成績評価(Evaluation method)

筆記試験(Written exam)	実技試験(Practical exam)	レポート試験(Report exam)	授業内試験（in-class exam)	その他(Other)
			70%	30%

授業内試験等(具体的内容)(Specific contents)

■「筆記試験」は、10回以上の正当な出席が確認できた場合に受けることができる。出席に関する不正行為、授業内での迷惑行為などがあった場合は即時失格とする。
■「その他（30%）」は、TEAMSの課題やクイズに対する取り組み、授業に対する貢献度についての評価である。
■この授業は、TEAMSの活用にある程度精通していることを前提にしている。したがって「使い方がわからない、使ったことがない」は一切聞き入れない。授業内容に関連した課題やクイズに、毎回のルーティンとして取り組んでいるかを重視する。

■テキスト(Textbooks)

No.(No.)	テキスト名など(Text name)	ISBN(ISBN)
1	津堅信之　「日本アニメ史　手塚治虫、宮崎駿、庵野秀明、新海誠らの100年」　中公新書	978-4121026941
2		
3		

4		
5		

■参考図書(references books)		
No.(No.)	テキスト名など(Text name)	ISBN(ISBN)
1	鈴木敏夫　「天才の思考　高畑勲と宮崎駿」　文春新書	978-4166612161
2	津堅信之　「新版　アニメーション学入門」　平凡社新書	978-4582858365
3	氷川竜介　「日本アニメの革新　歴史の転換点となった変化の構造分析」　角川新書	978-4040822044
4	数土直志　「日本のアニメ監督はいかにして世界へ打って出たのか？」　星海社新書	978-4065303078
5		